GUNMA PREFECTURAL LIBRARY
群馬県立図書館
新収蔵資料抄
Vol. 22
2022/ 9/ 2 発行
不定期刊

最寄り図書館に取り寄せ可

ファンシー・ピクチャーのゆくえ
英国における「かわいい」美術の誕生と展開

佐藤 直樹／著　中央公論美術出版　2022.3　本文 520p　22cm
723.33/ ネ 23　2022.5.13 受入　定価　6,000 円＋税

資料概要

世界的にも認知されている日本の「かわいい」文化。本書は、18 世紀の英国で誕生した「ファンシー・ピクチャー」の成立と発展を検証し、そこからカレン・キリムニックや、現代日本の奈良美智、村上隆などの「かわいい系」の美術、ハローキティのようなポップ・カルチャーに繋がる系譜を紐解こうとするものである。

ファンシー・ピクチャーとは、主に子どもをモティーフとした風俗画の一種で、見る者の情緒に訴えかけるようなタイプの絵を指す。英国王立芸術院の初代会長を務め、自身も多くのファンシー・ピクチャーを描いたジョシュア・レノルズ（1723-1792）が、1788年の『第十四講話』で、トマス・ゲインズバラ（1727-1788）の一連の作品をファンシー・ピクチャーと括ったことからこの名称が定着したともされる。ロココ画家のフィリップ・メルシエが英国にもたらした、また、起源に関してはジョルジョーネやカラヴァッジョまで遡る、との見方もある。

本書は、英国におけるこの分野の二大巨頭、ゲインズバラとレノルズ、そして、一時人気が衰えたファンシー・ピクチャーを19世紀に復興させたジョン・エヴァレット・ミレイ（1829-1896）を中心に論考を展開していく。さらに、ラファエル前派の画家たちと交流のあった写真家、ジュリア・マーガレット・キャメロン（1815-1879）や、思春期前の少女にこだわりを持っていたルイス・キャロル（1832-1898）、フィンランドの女性画家ヘレン・シャルフベック（1862-1946）をファンシー・ピクチャーとの関係から考察する。

特にゲインズバラとレノルズに関しては、時代的に先行するヴァン・ダイク、レンブラント、ムリリョ等との関係はもちろん、同時代フランスの風俗画家、ジャン＝バティスト・グルーズとの同異などが語られる。さらに、ファンシー・ピクチャーの予型として、トローニー（頭部習作）の販売があったこと、また、描いたファッションが古びることを恐れて肖像画のモデルにあえて前時代の衣装を着せる「ファンシー・ドレス・ポートレート」の成立があったことなど、二人に影響したであろうさまざまな要素が丁寧に説かれる。

本書表紙のミレイ作《チェリー・ライプ》（1879）は、新聞への複製版画の折り込みなど、商業的な展開で成功を収めた作品だが、レノルズの《ペネロピー・ブースビー》（1788頃）から直接の影響を受けている。そのレノルズも《無垢の時代》（1785頃）等で、版画や葉書を始めとする数えきれないほどの複製商品を作った。こうしたメディア戦略によって、多くの家庭に英国風の「かわいい」が広がったという。

商品としてのファンシー・ピクチャーはキッチュなものとしてみなされて顧みられなくなってしまうが、やがてそのキッチュさは、ポップ・アートによって肯定されていくことになる。そしてついには、現代日本で「かわいい」に姿を変え、ポップ・カルチャーとして本格的に息を吹き返したのである。

著者紹介

佐藤直樹（さとう なおき）

1965 年生。東京藝術大学大学院美術研究科後期博士課程中退。博士（文学）。国立西洋美術館主任研究員を経て、現在、東京藝術大学美術学部芸術学科教授。

主要著書・編著に『ヘレン・シャルフベック―魂のまなざし』（求龍堂、2015 年）、『芸術愛好家たちの夢―ドイツ近代芸術におけるディレッタンティズム』（三元社、2019 年）、『ヴィルヘルム・ハマスホイ　沈黙の絵画』（平凡社、2020 年）、『東京藝大で教わる西洋美術の見かた』（世界文化社、2021 年）ほか。

本紙は、県立図書館が新たに所蔵した資料（図書資料・視聴覚資料）から、ぜひご利用いただきたいものを厳選してご紹介するものです。これらの資料は、禁帯出資料を除き、最寄りの図書館に取り寄せできます。
なお、本紙の内容は Web にも掲載しています。ご覧の際は右の QR コードをご利用ください。
また、内容の誤り等、お気づきの点があればお知らせくださるようお願いいたします。

群馬県立図書館　〒371-0017 前橋市日吉町一丁目９－１　電話：027-231-3008

目 次

序論　「かわいい」美術の起源とその系譜
一　研究対象と問題提起
二　ファンシー・ピクチャー研究史
三　研究方法と目的
四　各章の目的と関係性

第一章　ファンシー・ピクチャー前史としてのゲインズバラの肖像画
一　「ファンシー」の概念と美術
二　英国のロココとゲインズバラ
三　ゲインズバラのファンシー・ドレス・ポートレート

第二章　ファンシー・ドレスの起源と展開について
一　ヴァン・ダイク風ドレスの愛好と仮装舞踏会
二　仮装舞踏会とファンシー・ドレス
三　肖像画におけるレンブラント主義とオリエンタリズム
四　トローニー
五　レンブラントのファンシー・ドレス

第三章　トマス・ゲインズバラのファンシー・ピクチャー
一　ファンシー・ドレス・ポートレートからファンシー・ピクチャーへ
二　ムリリョの《良き羊飼い》とゲインズバラ
三　風景画家としてのゲインズバラ
四　ゲインズバラとピクチャレスク美学の呼応
五　アルカディアのイメージとファンシー・ピクチャー
六　ゲインズバラによる最後のファンシー・ピクチャー

第四章　ジョシュア・レノルズの肖像画に見るファンシー・ピクチャー前史
一　ジョシュア・レノルズの人生と芸術
二　レノルズのレンブラント主義
三　男性肖像画の革新－優雅さから強さへ
四　女性肖像画の成功－ロンドン美女鑑
五　レノルズのファンシー・ピクチャーを検討するために

第五章　ジョシュア・レノルズのファンシー・ピクチャー
一　英国における子供の表現の起源について
二　肖像画と風俗画のはざまで
三　サブジェクト・ピクチャーとファンシー・ピクチャー
四　乞食のモデルたちとレノルズのファンシー・ピクチャー
五　性に目覚めたグルーズの「少女たち」
六　グルーズの《死んだカナリアと少女》とレノルズ
七　レノルズの《ストロベリー・ガール》
八　肖像画とファンシー・ピクチャーのあわいで
九　レノルズの「かわいい」からミレイの「かわいい」へ

第六章　ジョン・エヴァレット・ミレイのファンシー・ピクチャー
一　ミレイとラファエル前派
二　ラスキン―写実主義―写真
三　ミレイとバスティアン＝ルパージュ
四　ミレイの《チェリー・ライプ》とレノルズのリヴァイヴァル
五　ミレイによる最初のファンシー・ピクチャー《私の初めての説教》
六　ミレイの娘たち
七　《あひるの子》

第七章　写真と交錯する絵画
一　ジュリア・マーガレット・キャメロンとラファエル前派
二　ルイス・キャロルの少女写真
三　ホイッスラーの女性美とミレイの「かわいい」
四　ヘレン・シャルフベックのファンシー・ピクチャーとキュビズムへの展開

結論　ファンシーのゆくえ
あとがき
参考文献一覧
図版出典一覧
索引

県立図書館所蔵 関連資料

タイトル	責任表示	出版者	ページ数	出版年	資料コード
ゲインズバラ	ニコラ・カリンスキー／著　潮江 宏三／訳	西村書店	126p	1999	07355746
ジョン・エヴァレット・ミレイ	ジョン・エヴァレット・ミレイ／[画]　荒川 裕子／著	東京美術	159p	2015	13345657
東京藝大で教わる西洋美術の見かた	佐藤 直樹／著	世界文化社	264p	2021	17413998
窓の下で	ケイト・グリーナウェイ／さく　しらいし かずこ／やく	ほるぷ出版	64p	1987	01217017